会員のひろば

古文書解読の勧め

札幌市医師会
札幌マタニティ・ウイメンズホスピタル
沢井かおり

道産子として四半世紀、大学を出てからハマっ子になり30年、一昨年故郷に帰ってきた産婦人科医・漢方医・臨床遺伝医です。

私の趣味の一つが、８年前から通信講座などで学んでいる古文書解読です。主に江戸時代の公文書を対象としています。江戸時代は徳川幕府の管理が日本中に及んでいて、文字も「御家流（おいえりゅう）」に統一されているので、中世戦国時代よりは読みやすい文書が多いです。といってもすらすら読めるものばかりではなく、字典片手に前後のつながりなどを考えて一文字ずつ…いうこともよくあります。

はじめはパズル的感覚で、「何という字かわかる」ことをゲームのように楽しんでいました。しかし江戸時代の公文書を読む本当の楽しさは、武士や町人や農民の暮らしぶりが生き生きと感じられることです。倹約令の最中に娘の結婚式を盛大にやっちまった庄屋さんが「婿方が勝手に豪勢な結納品を持ってきちゃって」とか「絹の衣装はお古なんです」（庶民は絹禁止でした）とかお上に言い訳している文書や、担当先のツケの回収ができずに困り果てた大店（おおだな）の奉公人が、店を飛び出してツケ回収祈念に日光へ参詣に行ってしまった、ある意味とても真面目な青年のお話（後述の「古文書はこんなに魅力的」）など、江戸時代の人々がとても身近に感じます。

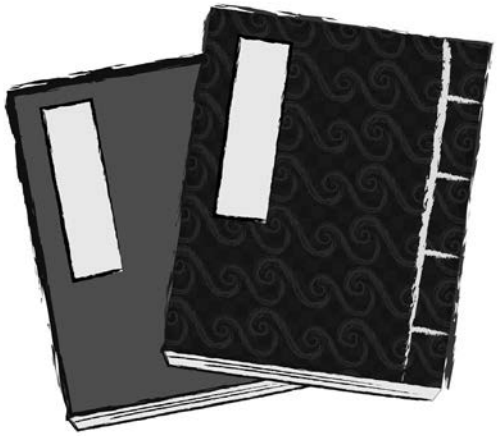
以前の地元である横浜市磯子の名主堤家文書（横浜開港資料館蔵）の中には、金蔵の女房まつと密通していた半右衛門が、見つかって追及されたら逆ギレして村人を罵ったりしているものもありました。このような地域の古文書＝地方文書（じかたもんじょ）は資料館や博物館、公文書館などの蔵書の中から探します。

さらに観光先の博物館などでも楽しみが広がります。仙台藩白老元陣屋資料館には、東北から白老に赴任する途中の航海日誌があり、読みやすい文書でした。風向きや風力によって出航したり停泊したり戻ったりと、右往左往ともいえる様子が見て取れ、動力のない船での困難な航海に思いを馳せました。

また、解読の途中で古文書とは別の発見をすることがあります。先日「この字は竹かんむりだ」ということは分かったので、漢和辞典で文脈に合う竹かんむりの字を探していくと…探していた字ではないのですが「笑」という字がありました。おなじみの字ですが、今まで竹かんむりだということを意識したことはありません。どうして竹かんむりなのだろうと説明を読むと、「咲」の字が誤って伝えられたものということでした。武井咲が「たけいえみ」なのは知っていましたが、「わらう」という意味は「咲」が先だったのかと妙に納得しました。豆知識にもなりませんが…。

ちょっと興味を持ったそこのあなた！　油井宏子先生の「古文書はこんなに面白い」「古文書はこんなに魅力的」「絵で学ぶ古文書講座」を読んでみてください。特に「絵で学ぶ古文書講座」はお勧めです。難破した漂流船の乗組員がアメリカの捕鯨船に救助されて日本に戻るお話です。古文書解読部分はすっ飛ばして、お話として読むだけでもワクワクしますよ。

一方、古文書解読をしているというと、掛け軸になんて書いてあるの？と聞かれることがありますが、いわゆる「書」の多くはクセが強くて読めません。某鑑定番組に出てくる偉人の達筆な書もほとんど読めません。あしからず。



海外旅行

網走医師会
網走皮膚科クリニック
川嶋　利瑞

筆者はここ数年、休暇の時は海外旅行を楽しんでいましたが、現在はいつ海外旅行に行けるのか全く見通しが立たない状況です。そこで最近は、自宅にいながら海外旅行気分を味わうことができるテレビの旅行番組を見るのが楽しみとなっています。そこで有名な番組ではありますが、私のおすすめの海外旅行番組をいくつか紹介したいと思います。

最初に紹介するのは「(新) 地球絶景紀行」(TBS系列) で、2010年から放送されています。旅人 (ナレーション) は初代が安田成美、二代目が森高千里、現在が吉田羊さんです。世界中の絶景を紹介する紀行番組。景色のみならず、人間ドラマ、動物の生態なども描かれます。最後は朝日か夕日の場面も多く、映像の美しさには目を見張ります。

次に紹介するのは「世界ふれあい街歩き」(NHK)。2005年放送開始の長寿番組です。毎回世界の一つの都市を取り上げ、地図を見ながら街中をぶらぶらと歩き、路地、市場、店舗などが紹介される。観光名所などはあまり出てきませんが、見ていてほっとする番組です。

三番目は、「迷宮グルメ異郷の駅前食堂」(BS朝日)。2018年４月放送開始。番組タイトルのように、グルメ番組ではありますが、タレントのヒロシが世界各国の鉄道駅を途中下車し、駅前の路地、市場などを散策し、最後に駅前の食堂 (レストラン) で食事をする番組です。観光地は出てきません (イタリアのポンペイの時も遺産の中には入れてもらえませんでした) が、中学生レベルの英語で、レストランを探し、食事を注文するのは見ていて飽きません。

最後は付録となりますが、NHKの語学番組「旅するスペイン語 (フランス語、イタリア語、ドイツ語)」は、旅番組としても楽しめましたが、今年秋からのシリーズは、国内収録の「旅するための…」に変わってしまったのは残念でした。ただし、ロシア語については、「ロシアゴスキー」として、再放送ではありますが、モスクワとサンクスペテロブルグの旅行番組としても楽しめます。

以上、筆者の好みの海外旅行番組を紹介させていただきましたが、やはり本物には叶いません。感染が落ち着いて自由に海外旅行に行ける日が１日も早く来ることを祈っています。

「哲学の木」を探して

帯広市医師会
北斗病院
今村　隆史

京都を旅立ち北海道で初期研修が始まって、早いもので１年と６ヵ月が経ちました。去年の３月に車を運転し、フェリーで北海道に上陸し、雪の降る日勝峠を越え帯広に向かったのが今となっては遠い昔のように感じます。

かつて、僕が初期研修先を北海道にしようと思い立った理由の一つに「写真」がありました。大学時代、僕はモノクロフィルムで写真を撮ったり、暗室で現像やプリントを行っておりました。ある時、僕はマイケル・ケンナという写真家を知りました。写真の町、東川町の写真賞も受賞している、イギリス出身の風景写真家です。彼は日本が好きで、“Hokkaido”というタイトルの、北海道の風景写真のみを集めた写真集が出版されたこともあります。僕が感銘を受けた彼の写真の一つに、かつて屈斜路湖畔にあった木を撮った写真があります(興味がある方は「ケンナの木」で調べてみてください)。「ケンナの木」と呼ばれていたそのミズナラの木は伐採され今はありませんが、伐採されるまでマイケル・ケンナは毎年北海道を訪れてその木の写真を撮り続けていたと言われています。彼が自然との対話の中で、心象風景の答えとしてたどり着いたのがその「ケンナの木」なのではないのだろうか、と僕はふと思いました。「ケンナの木」は彼にとっての「哲学の木」なのだろうと、そう直感したのです。そして、僕は北海道で生活している間に自分の「哲学の木」を探してみよう、と思いました。

各々の人に、人それぞれの心象風景があると僕は思います。日常生活の中で、そのような風景に出会えればどれほど素晴らしいことだろうか、といつも思うのです。この文章を最後まで読んでくださったあなたも、ご自分の「哲学の木」を探してみませんか。

年男のこの１年

石狩医師会
鎌田内科クリニック
鎌田　　覺

小生はネズミ年生まれで、北海道医報本誌の１月号「新春随想」に今年の年男に選ばれ『伊勢神宮に参拝』と題して紀行文を寄稿させていただいた。この１年間ネズミにまつわる事件が相次いで、不思議な印象を受けたので、その２～３を書いてみた。

当院の狭い待合室には、開業以来、患者さんの目の保養と癒やしに少しでも役立てばと、金魚と熱帯魚の水槽を置いている。小さな熱帯魚の水槽には主にグッピーを飼っていたが、今年はネズミ年にちなんでミッキーマウスプラティといって、お尻がネズミに似た熱帯魚のオス５匹をアクアリウムから買い求めてきた。半年ぐらいが経ち、赤ちゃんが10匹ぐらい生まれていることに職員が気づいた。産室を買ってきて隔離して育てた。その後、ミッキーマウスはネズミ算式に増え、どうやらメスが１匹交じっていたようで、今は数十匹に増え、大・中・小・赤ちゃんと水槽の中は三密状態が続いている。

次に猫の額ほどのわが家の中庭には、大切にしている「一位」の木がある。その木の下の枝が枯れてきた。今夏は暑い日が続き、暑さのためかと思っていたが、どうやら木の根をかじる動物が居るらしい。生き物の気配が感じられた。毎年、中庭には生ゴミ用に手作りのコンポストが置いてあり、畑の肥料にしている。ある日、コンポストの回りの土に穴が開いているのを発見。蓋を開けると中に30cmぐらいのネズミを発見し、飛び上がって驚いた。草取り鎌を打ちつけるも、ネズミも飛び上がって夏草の中に逃走してしまった。ホーマックから強力殺鼠剤を購入しネズミに喰わせたが、ネズミは土に穴を掘ってコンポストの中に入り込んだ。今度は昔からある金網のネズミ取りを設置、ドブネズミ１匹、クマネズミ２匹、ハツカネズミ１匹を捕獲、駆除した。

さて数年前、わが家の家系図を作成したことがある。その時遊び心で「干支」も調べたところ、娘婿の家族には96歳のネズミ年生まれの父と、今年還暦の婿、その長男で24歳の医学生と、三代に渡りネズミ年生まれがいることが判明した。

さて今年の年末、小生にとっては「青天の霹靂」ともいえる出来事が起きた。「Ｅ型肝炎ウイルスによる急性肝不全」に罹患したのである。医学の進歩と手稲渓仁会病院の先生方の適切な治療により、お陰様で命をとりとめ、今は快方に向かっている。心から感謝している。

年男の小生にとって、今年は良い年だったのか、悪い年であったのかよく分からない。来年のウシ年には新型コロナウイルスが早く終息して、通常の日常生活が戻ってきて、そして良い年になるように心から祈っている。

参考文献「十二支物語」諸橋轍次著（大修館書店）

親バカ

上川北部医師会
名寄市立総合病院
萱場幸太郎

元々私は子供が苦手だった。自我が芽生え、自分の欲望に忠実な時期、つまり乳児期～小児の時期が特に苦手だった。あまりあるエネルギーを全て自分の視線に入ったものに全力でぶつけ、所構わず泣き喚き、傍で親や祖父母が困り果てて立ち尽くしている光景を見ると、他人事ながら背筋がゾワゾワと冷たくなったものだ。もちろん子供の成長にとってそれが好ましいことは理解している。が、どうしても苦手だった。苦手なものは苦手なのだからしょうがない、と思って生きてきた。

私にも子供がいる。もうすぐ２歳になるが、やはりかなり強く自己主張をするようになってきた。気に食わないことがあると、喉から血が吹き出んばかりに泣き叫び、土の地面だろうがショッピングモールの床だろうがゴロゴロと転がり回り、抱っこしても暴れ回って逃げ出し、そうかと思えば抱っこを求めて泣き叫ぶ我が子には、やはりいたたまれない気持ちにはなる。

ところが、不思議と最近、以前ほど心がざわつかない。むしろ微笑ましくすら思えるくらいになっている。他人の子供を見ても、ゾワゾワとした不快感を覚えることがない。その理由はなんだろうと考えてみると、我が子に理由があるのだろうと思う。早い時間に帰宅すると私を飛び跳ねて満面の笑顔で迎えてくれる我が子。自分が眠りにつくまで一緒にいるようにと、「パパも、ママも」といいながら私たちの手を引き寝室に向かうようにもなった我が子。私が仕事に向かうときは背後から悲痛な泣き声と共に送り出してくれる我が子。なんとも可愛い我が子のこの行動に、「子供が苦手」という意識の上から「子供は何て可愛いのだろう」という刷り込みをされているのだろう。我が子は可愛いから、他人の子も可愛く思える。なんとも単純な自分にびっくりしてしまう。

もし、普段の可愛い行動が、子供は可愛いという刷り込みをするための行為だとしたら。子供は恐ろしいほど賢く的確な生存戦略を持った生物と言えるだろう。その戦略にまんまと乗せられた私は、今日も帰宅を急ぐのだった。

６年半ぶりに仕事に復帰して

函館市医師会
函館協会病院
河野　文子

６年半の子育て主婦生活から仕事に復帰し、１年半が経ちました。私は第二子出産の際に、産休を取らずに仕事を離れました。一人目の出産後、初めての育児と仕事の生活は、想像していた以上に大変で、同じ勤務医の夫は帰宅も遅く、お互いの両親は遠方であったため、二人の育児をしつつ仕事と家のことをしていくのは難しいと考え、退職しました。

子育て中心の毎日は、幼稚園の役員をしたり、母親サークルの活動をしたりと充実していましたが、下の子が年長になるころ、「私はこのままの生活を続けていいのか？」と思い始めました。仕事を辞めてはじめのうちは、書類などの職業欄に「医師（育休中)」と書いていましたが、４年、５年と経つうちに、仕事をしていないのに「医師」と書くことに、なんとなく後ろめたい気持ちがしていたのです。年齢も40歳となり、「今、仕事に戻らなければ、もうその機会は来ないかもしれない」とも思いました。

夫婦で話し合い、下の子が小学校に上がるタイミングで私は子どもたちと地元に戻り、両親に子育てを手伝ってもらいながら仕事を始め、夫はそのまま残ることになりました。ありがたいことに今の病院にご縁をいただき、令和の幕開けとともに新生活が始まりました。

復帰してはじめのうちは、白衣を着るだけで動悸がし、看護師さんに「先生」と呼ばれるたびにビクビク挙動不審になっていました。薬一つにしても、後発品が増え、名前を聞いても全くピンと来ず、ただただ自分の不甲斐なさに落ち込む毎日でした。６年前に退職すると決めた当時の私をここに連れてきて、「なんで辞めたの？　どうして頑張って続けなかったの？」と説教したい気持ちでいっぱいでした。

自分の力不足にへこみつつも、職場の環境にも恵まれ、１年半たった今は仕事にも先生と呼ばれることにも慣れ、一歩踏み出してよかったとしみじみ感じています。

復帰にあたって、自分自身の不安はもちろん、子どもたちが函館での生活と新しい学校に慣れてくれるかという心配も大きかったのですが、子どもたちは親が思っている以上にたくましく、元気に過ごしてくれたのが幸いでした。特に内地育ちの子どもたちにとって、函館の給食は量も多く、なによりとても美味しいのだそうです。昨日、仕事から家に帰って「学校はどうだった？」と聞いた第一声は「今日は給食のおかわりじゃんけんに勝ってホタテフライ３つ食べた！　美味しかった！」でした。

半沢ロス

札幌医科大学医師会
札幌医科大学皮膚科
塩野谷愛香

日曜日の夜がさみしくなってから久しい。先日、ドラマ『半沢直樹』が最終回を迎えた。

我が家も世間の例にもれず、日曜日の夜は家族で半沢直樹を見ていた。夫は片手にビールを、長男は片手にミロを持ちながら鑑賞するのが常であった。

小学校１年生が「債権放棄」という言葉を理解しているかどうかは甚だ疑問であったが、彼なりに勧善懲悪のストーリーが爽快であったようだ。別の日に正月のことを話していたら、「福袋の『ふく』って、副頭取の『ふく』？」と尋ねてくるほど半沢ファンになっていた。

４歳の次男は大和田取締役の顔芸が心の琴線に触れたらしく、事あるごとに「死んでもいやだね」を繰り返して周囲をいらだたせていた。

私はストーリーを楽しむ反面、半沢の妻である半沢花の良妻ぶりを見ては我が身を顧みることがしばしばであった。さりげなく写される料理の品数の多さに、若干気まずい思いをしていた。シーズン１の話になるが、花が半沢の故郷へ行き、義母に話を聞いてくる場面があり、その日の食卓シーンに出てくる味噌汁だけ白味噌であった（と、半沢マニアのTBS安住アナウンサーが言っていた)。製作スタッフが細かなところまで配慮していたのがうかがえる話だと思った。

花を見ていると、いつも笑顔でいるだけで家族が前向きになれるということを改めて思い知らされた。半沢が退職の覚悟を決めたときに発した「生きていれば、なんとかなる！」というセリフはシンプルながら力があると感じた。今後の人生で「辛い、もうだめだ」と思うことがあっても、「生きてさえいれば」と思うと、カウント８で起き上がれる気がする。

ふと見ると、三男がよちよち歩きながら寝室へ入っていった。日頃自分にちょっかいを出す次男が眠っていることをしっかり確認すると、つぎの瞬間、おもちゃで殴打し始めた。「倍返し」を果たした彼の顔は、心なしか晴れやかだった。

還暦　雑感

札幌市医師会
手稲あけぼのレディースクリニック
玉川　晶子

昨年の暮れに誕生日を迎えて60歳になった。当然のように毎年歳を重ねてきたわけだが、今まで一度も年齢を意識したことがなかった。ところが、60になって随分気になることが増えてきた。昨日まで普通にやってきたことが、急にできなくなるわけではない。多分、徐々にできる部分が減ってきていることに気がつかなかったというより認めたくなかっただけなのかもしれない。

第１に、視力というより、目の持久力がかなり落ちていることに気づいた。とにかく長時間目を使うと目が疲れて集中できなくなる。長編小説などを一気に読み上げることができなくなった。気になった論文などを読もうと思っても、長いと途中で撤退、結局abstractのみで終了ということが多くなった。眼鏡の種類もパソコン用、診療用、手術用、手元用といろいろ使いこなさなければいけない。不便である。

第２に、明らかに記憶力が低下していることを認識した。若いころから、記憶力には自信があり、ほぼそれだけで受験期を乗り切ったと思っているが、その記憶力が無残なまでに落ちている。診療内容はなんとか覚えているが、患者さんの名前が出てこない。あれ、それがやたら増えてきた。覚える力と、思い出す力ともに低下してきているようだ。若い頃、自分の親や、上司があれ、これといった指示語で会話を成り立たせようとするのを、まどろっこしいと思って聞いていたが、まさにそういう会話を今自分がしている。ショックである。

第３に、心の底から楽しいと思う気持ちが薄れている。感動する力が落ちている、いわゆるこれを感性の鈍化というのだろうか。この言葉は悲しくなる。

歳はとってみないと分からない…まったくその通り。若い頃に実感できるものではありえない。さまざまな変化に、不安な気持ちになることもあるけれど、悲観的になることはないかなあ。みんな歳をとるんだし。

総務省が発表した人口推計によると現在65歳以上の高齢者は総人口の28.7％で、女性の４人に１人は70歳以上ということである。となると、ただ、漫然と歳をとっている場合ではない。できるだけ長く、社会を支える側でありたい。

歳をとるということは、いろいろな機能の低下に気づきつつ、いい塩梅に自分を納得させながら、それでも精一杯やりたいこと、やれることをやり続けようと懸命にあがいていくことなのかなあ…と最近考えるようになった。

捨てられない・片付けられない

苫小牧市医師会
苫小牧東病院
濱田　耕司

私の部屋はかなり散らかって、魔界だと妻は言う。机や棚など何らかの平面スペースの上は、いろいろな雑物でごったがえっている。本来、棚や引き出しから出した物は、使用後に戻せばいいものの、また後で使うかもしれないと思った物は、すぐに手が届くように、その辺のスペースに置いたままにしてしまっていた。

それが積り積もって、棚や机の上のスペースは全くない状態になってしまい、かつ、物が２重、３重に重なっている状態になっていた。さすがに片付けようかなと気になり、ついでに不要な物は捨てようと思った。部屋に置いている物の割合で多いのは本になる。

気づけばそのほとんどは、この10年くらい（中には20年）開いたり、読み返していないような気がした。内容が刷新されていっている内容の本は捨てることにした。

それでも、まだたくさん残っていて、面白そうだからとか、勉強になりそうだから購入して全く読んでない本がたくさん出てきた。忘れられていたぐらいなので、置いといてもどうなのかと客観的には思うのだが、捨てるには、購入費用や今まで保管していた経緯が無駄になるような思いが（捨てることより）勝り、そのまま置いておくことにした。

そのほかに、論文、学会発表、執筆などで自分で調べファイルした資料がたくさんあった。そのほとんどは、最後に見直したのは思い出せないぐらい前になる。１つのテーマに対し関連文献などをたくさん集めたり、まとめ読んだ自分を懐かしく思い、あー、こんな知識や情報があったもんだと勝手に感心しつつも、ほとんど忘れていた状態を思い知らされた。今後、これらの資料を見返すのは、今まで見直してなかった経緯もあり、客観的に考えてほぼないと思えるのだが、購入して読んでいない本を捨てる以上に、これらを捨てるのはもったいない（とくに自分が作った資料なゆえに）思いを強く感じ、とりあえず今は捨てないことにした。次の日の出勤日、医局で机を見渡したところ、私の机の上がおそらく最も混沌としていた。自分は、人一倍捨てられない・片付けられない性格なんだなと痛感した。

接待を伴う飲食店

帯広市医師会
帯広泌尿器科
井上　隆太

私の数少ない趣味は旅行でしたが、新型コロナウイルス流行の影響で十勝管内からなかなか出られない状況が続いております。私の実家は岩手ですが、実家にもしばらく帰れなさそうです。

しかし、好きなこともできませんが、苦手なこともしなくてよいということに気が付きました。私の苦手なことはカラオケです。特にカラオケを置いているスナックを最も苦手にしています。

学生の頃からカラオケは苦手で避けるようにしていましたが、研修医２年目の時に、より苦手になる出来事がありました。その当時、夜中まで仕事をした後、毎週のように上司にスナックへ連れて行かれました。いやいや歌わされたあげく、こんな下手な歌は今まで聞いたことがない、と言われ続けたのがトラウマになっているようです。

もともとお酒は好きで飲み会には参加する方なのですが、ほとんど必ずと言っていいほど２次会はスナックやカラオケという流れがあり、それを避ける方法をいつも考えていました。２次会がスナックとなれば１次会の後半から気配を消して、人知れずいなくなる方法を考えていましたが、あまりうまくいった試しはありません。

ところが最近のコロナ禍でカラオケやスナックなどが３密のため感染リスクが高いと指摘され、全く行く機会がなくなりました。３密とはみなさんご存じの通り、新型コロナウイルス集団感染予防目的に厚労省などが掲げた３つの密、「密閉」「密集」「密接」のことです。

スナックはそのすべてがそろい、さらに大声で歌う場所です。カラオケが嫌いなのもありますが、田舎育ちのせいか密閉、密集も苦手にしており、それらが重なってスナックを最も苦手な空間と感じてしまうのだと思います。密接が好きか嫌いかは相手によると思いますが、まず間違いなく店員さんにもカラオケを強要されるため、店員さんにすらなるべく話しかけられないようにしていました。

旅行に行けないストレスは感じますが、スナックに行くストレスからは解放されました。スナックの方々やスナックを愛してやまない方々には大変申し訳なく思うのですが、こんなに苦痛に思っている人間もいることをご理解いただければと思います。そもそも、スナックに限らずどこに行っても人が多すぎたのだと思います。

いつかまたみんなでスナックに行く日が来るのでしょうか？　カラオケが無い、開放的なスナックがニューノーマルになれば、私もスナックに行きやすくなるでしょう。

コロナ時代の小児科医

江別医師会
松尾こどもクリニック
松尾　　巧

コロナのパンデミックが始まり、世界中で大きな変化が起きています。

今年の１月から騒ぎが続いていますが、毎日TVを見ながら、一市民として一医師として、「何故オールジャパンで立ち向かえないのか」と思われてなりませんでした。対策分科会長の尾身先生はじめ皆様ご苦労様でしたが、先生たちだけではなくウイルス学と防災防疫学の２面から、分析と対策を進めていく組織が必要だと思いました。

それにしても何か事件があれば、政府が一部の学者、医師に要請しその場をしのいでいくのは見ていて不安です。今回は対策分科会の方針で乗り切れそうですが、やはり国民の健康と安全を考え、常設的に研究と指導をしていく組織が必要だと思われました。

これを機に日本版CDCを立ち上げることが望まれます。

新型コロナウイルスを制圧できるまで、数年はかかると思いますが、小児科医の仕事は随分変わりそうです。以下、現状と小児科医が不安に感じている点について述べてみます。

第１に病院での感染リスクを心配した患者さんが非常に多く、受診抑制が広範に起こりました。基本的には、現在でもこのトレンドは続いているようです。

第２は、手洗い、マスク、ソーシャルディスタンシングが徹底的に行われ、普通の感染症が激減しています。例えば今年は、夏場のウイルス感染症である手足口病や、アデノウイルス感染症が通常の１/100位に減少しました。インフルエンザも今年は少ないでしょう。

第３は学校や保育所レベルでコロナが増えてきていますが、小児科医全体としてどのように対処していくのかクリアなイメージが湧きません。個々の小児科医としても以下のような悩ましい点があるのです。

①「発熱外来」をどうするか？　小児科の患者さんの半分は発熱患者です。コロナが近隣で発生しだしたら、どう対処すべきなのか？

②院内でコロナ検査をする場合、院内の動線はどうしたらよいのか？

③コロナ陽性の患者さんへの対処は？　患者さんが増えてきているが、入院体制は大丈夫なのか？

④情報開示の問題もあります。「どの保育園、幼稚園、学校で患者が発生している」という基本的な情報は一線で働いている、私たち医療従事者には伝えられていません。

私たちが患者さんの命を守らなければならないのはもちろんですが、自身とスタッフの命も守らなければなりません。この点で適切な情報開示が早急になされることを望みます。

いずれも難問ですが、行政とも協力して、この未曽有な局面を乗り越えていきたいと思います。

ヨーロッパの主な国々の薬局の名称あれこれ

札幌市医師会
JR札幌病院
長多　正美

わたしの前身は薬剤師です。そのせいもあってか、海外旅行をすると訪問先の薬局の看板に目が行きます。他国の薬局の名称に興味があるのです。そこでヨーロッパの主だった国々の薬局の名称を調べてみました。

英国はpharmacy（ファーマシイ）。フランスはpharmacie（ファルマシー）。スペインはFarmacia（ファルマーシア）。ポルトガルはFarmácia（ファルマチア）。イタリアはFarmacia（ファルマチア）。これらの国々の名称は出だしがpharmaで共通しているので、それぞれの語源は同じだと思います。Pharmaは製薬会社、医薬品、薬理学の意味で、薬品・薬剤に関する言葉となります。

ところがドイツに行くと途端にまったく別物になります。ドイツではApotheke（アポテケ）となります。初めてドイツに行ったときにApothekeの看板を目にして、これは一体何の店舗だろう、と店の前に行ってみると、何と薬局だった、との記憶があります。

ヨーロッパの地図を思い描いてみてください。ドイツ連邦共和国は, 国境を接する国が世界で一番多い国ではないでしょうか。北はデンマーク、東はポーランドとチェコ、南東にオーストリア、南はスイス、そして西側には北からオランダ、ベルギー、ルクセンブルク、フランスと、実に９ヵ国の国々と接しているのです。

それでは各国の薬局の名称を順に列記してみます。

①デンマーク：apotek②ポーランド：Apteka③チェコ：lékárna④オーストリア：ドイツ語圏にてApotheke⑤スイス：三つの言語が混在し、ドイツ語圏ならApotheke、フランス語圏ならPharmacie、イタリア語圏ならFarmaciaと３種類となります。⑥オランダ：apotheek⑦ベルギー：フランス語圏なのでpharmacie⑧ルクセンブルク：Apdikt⑨フランス：pharmacie。

国境は接していませんが、ロシアはａｐｔｅｋａ（アプチェーカ）またはApteka（アプテカ）です。ハンガリーはGyógyszertárとちょっと趣が異なります。

さて、このようにヨーロッパでの薬局の名称を見ていくと、あることに思いつきました。それはPharmaが付くのはフランス、イタリア、スペイン、ポルトガルと英国を除いて南西ヨーロッパの国々になります。一方、ドイツ周辺から東地域の国々はApotheの語源のグループになっています。

Apothekeの由来は、ギリシア・ローマ時代にすでに薬物を扱う倉庫あるいは商店を意味する言葉としてアポテカ（apotheca）というラテン語の用語がありました。アポテカはギリシア語のアポテケ（apothēkē）（＜予備に取っておくこと＞の意）に由来し、ドイツ語のアポテケ（Apotheke）、フランス語のアポティケール（apothicaire）、英語のアポセカリー（apothecary）といった後世の薬店、薬局を指す言葉となったとされています。フランス語にも英語にもapotheを語源とする言葉はあるのです。それならヨーロッパ全域がApotheを語源とする名称で共通して表記しても良さそうですが、そうとはならないのには何か理由があるのでしょうか。

今日では言語学的に死語と呼ばれるものにラテン語があります。ドイツのギムナジウム（日本の中学・高校一貫校）では、今も外国語の一つとしてラテン語を必修科目として学ぶところがあります。日本でも医学教育の解剖学用語はラテン語が主体です。

ラテン語（Latin）は、紀元前にイタリア中央西部のラティウム（Latium）地方で用いられた言葉です。ラティウムにはローマという都市が建設され、ローマ帝国の首都に発展し、ラテン語はローマ帝国の公用語として広く用いられるようになりました。

四世紀以降になるとラテン語はキリスト教の公用語としての地位を確立し、広くヨーロッパ社会に宗教的、文化的影響を与えることになったのです。また、ルネサンスを経て18世紀に至るまで、ラテン語はヨーロッパの学問研究の共通言語としてとりわけ重要な役割を担っていました。

「ラテン文学」というのは、南米の文学を指すのではなく、ラテン語で書かれた文学作品を意味しています。今日のイタリア語・フランス語・スペイン語・ポルトガル語などは、ラテン語から派生した言語です。一方、英語・ドイツ語・オランダ語などはゲルマン語から派生した言語です。フランスやイタリアのことを「ラテン・ヨーロッパ」と呼んだりするのも、これらの国の言語―フランス語、イタリア語―がラテン語から生まれた事実に基づいています。

ラテン語で薬局はpharmacopoliumです。まさに南西ヨーロッパの国々で使っているPharmaが出だしの言葉なのです。

ラテン語は文化的には死語ではけっしてないようです。漢字（Chinese character）の誕生は紀元前の中国に遡りますが、漢文化の影響を受けた日本人は、今も漢字を用いることによって新しい文化創造を行っています。同様に、ラテン語の圧倒的な影響を受け続けたヨーロッパ人、特に薬局の名称がPharmaで始まる国々の人たちは、自国の言語を用いながらも、そこに見出せるギリシア・ローマ文化の影響を無意識のうちに「今」に生かし、「未来」に伝えようとしているのでしょうか。

これでヨーロッパでの薬局の名称がドイツを中心に東と西でまったく異なる理由がおおよそ分かりました。また一つわたしの中の疑問が解決しました。もっともPharmaがラテン語から由来している言葉だとご存知の読者の先生方にとっては、今回の話はまったくつまらなく、とんだ茶番であったことをお許しください。

右脚ブロックの鑑別診断

札幌市医師会
北海道労働保健管理協会　札幌総合健診センター
中村　一博

健康診断のため毎日多くの心電図を読んでいると、右脚ブロックには似て非なるものが多いことに気がつきます。今回はこのことについて当センターで記録された心電図を提示して説明してみたいと思います。

図の①は典型的な完全右脚ブロックです。完全右脚ブロックの特徴はV1誘導のRSR’パターンとV5誘導の幅広いＳ波です。しかし、これで右脚ブロックと診断して終わりではありません。このあと、電気軸をチェックします。電気軸で－45度以上の左軸偏位もしくは＋120度以上の右軸偏位を伴っていれば左脚のヘミブロックを合併しています。単なる完全右脚ブロックであれば経過観察で良いのですが、２枝ブロックであれば精密検査の適応になります。

②も完全右脚ブロックですが①とはどこか違います。よく見るとV1とV2誘導にＱ波を認め、V5誘導のＴ波が陰転しています。通常、ただの右脚ブロックであればV5誘導のＴ波は①のように陽性です。②のV5誘導に見られる陰性Ｔ波は左右対称で冠性Ｔ波と考えられます。これらの所見は前壁の陳旧性心筋梗塞の合併を示唆しています。もちろん要精密検査です。

③ではV1とV2誘導のQRSの後ろに謎の細波を認めます。一見QRSの幅が広いように見えますが、V5誘導を見るとQRS幅は正常ですから、完全右脚ブロックではないことがわかります。V1とV2誘導の細波は断片化したイプシロン波と思われます。この心電図からは不整脈原性右室心筋症（ARVC）が疑われます。ARVCは突然死の原因になりえるので要精密検査です。

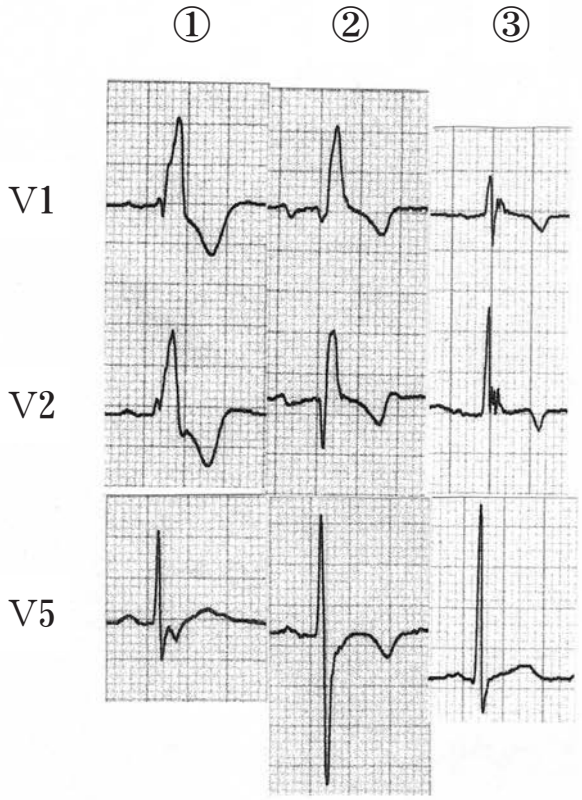
④も右脚ブロックに似ていますが、QRS幅は広くなくストレイン型の陰性Ｔ波を認めます。これはRVHストレインといって右心室の圧負荷所見です。若年者であれば小児期の名残の可能性もありますが、慢性肺塞栓症などで見られることもあり精密検査が必要になります。

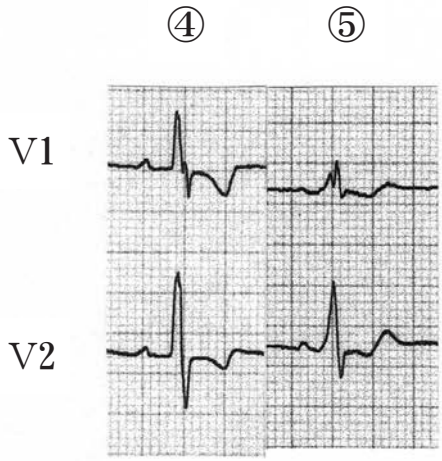
⑤はＡ型のWPW症候群です。PR間隔が短縮しデルタ波が認められます。WPW症候群はV1誘導の波形によってＡ、Ｂ、Ｃ型に分類されますが、Ａ型は右脚ブロックに似た形をしています。WPW症候群はカテーテルアブレーションで根治可能ですから、これも要精密検査です。

このほかに右脚ブロックに似た波形を示すものとしてcoved型のブルガダ症候群がありますが、これはあまりにも有名なので今回は省略します。

右脚ブロックはありふれた心電図所見で先生方もよく目にされると思います。本当に右脚ブロックのみであれば、健康診断でも軽度異常もしくは要経過観察という判定になります。しかし、上記のように右脚ブロックとの鑑別診断が必要な疾患は要精密検査なものばかりです。右脚ブロックを見るとつい気が緩みがちになりますが、実は油断できないと思います。心電図を見て右脚ブロックかなと思ったら、上記の鑑別診断のことも思い出してください。

当センターには常時５～６人の検査技師さんがいて、私の心電図の読みが甘いと「先生、この心電図ですが…」とツッコミを入れてくれます。心電図を前にして技師さんたちと話しているうちに答えが見えてくることもよくあります。それがまた、当センターでの私の楽しみでもあります。





竈の火で茹でた うどんをすする朝

函館市医師会
函館渡辺病院
水関　　清

営業時間は、日曜を除く毎朝午前５時からの数時間で、うどん店を示す看板も暖簾もない。メニューは、380円のうどん１種類のみで、お品書きすらない。店に入って、座席に座ることそのものが、注文なのである。

毎朝通うのが日課となっている常連客は、そろそろ開店という時間になると、一人、二人と集まってきては、店主に声をかけて厨房に入り、竈にかけたお釜に張られた湯の中に、冷蔵庫から取り出したうどんの玉を投げ入れる。その隣にある鍋を満たすのは、イリコ出汁で味を調えられた、うどんつゆである。洗い場にふせてあるどんぶりをとって、茹で上がったばかりのうどんの湯を切ってそこに空け、大きなお玉で掬ったつゆを２杯かけたところに、厨房に隣り合う、客席を兼ねた土間の一角で店主が作ったばかりのかき揚と、ふたつに切ったじゃこ天のひと切れを載せれば出来上がりである。お好みでネギを散らして七味を振り、器用に片手でわった割り箸を手に、厨房と客席を隔てるカウンターに座って、美味しそうな音をたててすすりあげては、またたく間に平らげる。なじみ客と店主との、息の合った動線の美しさに、しばし見とれてしまう。

実家を離れて以来、年に数回しか顔を出さない私の手元には、店主自らが出来上がったうどんを届けてくれる。聞けば、創業66年を迎える2020年の夏で、店じまいをすることを決めたという。そういえば、客席を囲む板壁に、「閉店のお知らせ　お客様66年間ありがとう御座いました。今月22日をもちまして閉店致します。」と、マジックで書いた紙片が、ピンで留められている。

その隣には、「持ち帰り出来ません。」という紙片も掲示されている。使い込まれた長机が２台と椅子が８脚ある客席、厨房との間を仕切る、本来なら出来上がったうどんを置くカウンターにも３脚の椅子が持ち込まれて臨時の客席になっているが、それを含めても11人が店に来ると満席になってしまう。うどんは食べたいが、座る席がなかったり待ち時間がない馴染み客のために考え出されたのが、「お持ち帰り」である。店主に声をかけたうえで、満席の店内の様子がうかがえる、店の前の道路に並んでいると、あらかじめ客が持参してきた鍋の中に、店主自らが人数分のうどんを入れてくれるのである。もちろん、じゃこ天やかき揚を入れて持ち帰る小鍋は別に用意しておくのだが。

このうどん屋さんから徒歩10秒の私の実家では、寝苦しい夜を過ごした夏の早朝、ラジオ体操が始まる前にこのうどんを鍋で持ち帰って、朝餉にしたものである。茹でたてのうどんに、かけられたおつゆがほんのりと絡み、熱帯夜明けの朝の食欲を刺激する妙薬となってくれた。

厨房に入って自らうどんを作っては食べていく常連さん、家で待つ家族のために鍋を抱えては道路で待つお馴染みさん、そして、知らない客同士が、肩を並べてうどんをすする光景がみられる客席。築年数不明の民家そのものの風情が醸し出す、表現する言葉がなかなか見つからない外観。中に入ると、薪の炎が燃えて今なお現役を続ける、竈が活躍している厨房、そして、唯一の涼をとる手段である壁掛け式の扇風機と、そのすぐ下の壁にかけられた昔懐かしい日めくり式の暦が見下ろす、長机と椅子の置かれた、８人で満員になってしまう土間。長年にわたる竈の燻煙で、みごとな深みのある色合に渋く染め上げられた天井板の木目が、頭上に連なる。

建物の玄関が西南を向いているために、営業時間である早朝はいつもうす暗いが、そこを切り盛りする店主はきびきびと働き、せわしない厨房に出入りする常連さんも、自分で作ったうどんを黙々と食べるや、どんぶりを洗って片付け、代金を置いて出ていくためか、不思議な躍動感に満ちている。

客席には、メニューはおろか、テレビも新聞もない。よく来るお馴染みさんたちの中に、初めてらしい人が混じっていても、店主の流れるような客さばきのおかげもあって、みな、違和感なくうどんをすすり、短い会話を交わしては、朝の空腹を満たしている。

この町には、ここのほかにも、うどん屋を名乗る店は多い。車を走らせれば、名の知れた店に行くこともできるが、この店で、他の客たちに交じって食べる時に感じる風情には格別のものがある。

数少ない壁の掲示物から察して、現在２代目である店主が、この店を継いだのは33歳の時であったらしい。そうであれば、この店の創業30年の時であり、現在66年を数える店の歴史の折り返し点の頃であったろう。店主の話によれば、閉店の決断に至った一番大きな理由は、道具の傷みであり、長年使い続けた竈の傷みであったという。

改めて考えてみると、竈の発達によって、調理者は裸火からの直接的な放射熱を避けて、より高温の炎で調理することができるようになったのである。そのことは、調理時間の短縮や調理方法の洗練につながり、高温での連続集中調理も可能となって、今日ある調理方法のほとんどの原型が確立されたのである。一見すると地味であるが、人類がたどってきた調理史の中で、確固たる位置を保っていた竈。長くこの店の厨房で、うどんの調理を支え続けた、その竈の火は、閉店後は人々の記憶の中で燃え続けることになる。

父の川柳遺稿集に思う。

北広島医師会
坂泌尿器科北広島クリニック
池田　龍介

1995年は１月の淡路島北部を震源とする阪神淡路大震災によりその年が始まり、３月には、日本中を震撼させるオウム真理教による地下鉄サリン事件と不吉な年であった。この年６月18日、小生の父　池田昭雄が享年68歳で天馬のごとく旅たった。昭和29年に、岡山県の山間部（ミツバチで有名な山田養蜂場の里に近く）に内科医として小さな医院を開業し、午前は外来診療、午後は夜遅くまで往診に明け暮れた日々であった。そうした日々から、

野分吹く風に逆らう往診医
生涯を往診医として喜寿近し

日々の診療の中、唯一の趣味は、往診中の車内で聞く８トラックの落語・浪曲・演歌全集であった。

さいはての海を絵にする演歌集

運動にも無縁であり、読書する姿ばかりであった。その頃の自分を、

遊びとは無縁に生きて古希近し

あるいは、

遊ぶ二字俺の辞書にはのってない

そうした中、運動など皆目無縁と思っていたが、60歳前から始めたゴルフは、母親に怒られながらも道具をあれこれ調達してなかなかの熱の入りようであった。

趣味ゴルフ書くには少し老いすぎた

自分でもゴルフがかなり面白かったようである。また、酒も好きであり、往診後やコンペの終わりなどかなりの量を楽しんでいたが、患者さんに飲酒について問われても、口ではきつく注意するものの、その本心は、

百薬の長に仕えて身を毒す

しかし、

断酒とはしっかり云えぬ飲める医者

最近の小生をみるようでもある。

田舎の一開業医として日々、過疎の始まった地域の医療保持（当の本人は全くそうした特別な意識も無く、淡々と求められるがままであったと思われるが）の日々であった頃、

同じ人に亦会いたるか過疎の道
過疎の谷彼岸の時だけ人多し

小生は、全く異なる専門を選び、大学の関係で金沢に住み、なかなか父とじっくり話すことはなかった。自分なりに大学に在籍する人間として診療・研究・論文作成と一応は頑張ってきたつもりであり、それなりに助手、講師、助教授と昇進し、その都度、父に報告してきた。さぞかし喜んでくれているものと思っていたが、遺稿集で初めてその頃の思いを知った。専門違いでも、地元に帰り手伝いをして欲しかったのであろう、一切口にはしなかったが…。

教授への道近ずいて故郷遠し

そうして、忙しく休むことなく機関車の如くに慌ただしく働きづめの毎日であった父だが、徐々に体調の不良を自覚するようになったようで、

古希近し生きた成果に悔い多し
古希近し一寸休めと肝不調

父にしては弱気な句が詠まれている。身体が思うように動かなくなってきたようである。いよいよ1995年４月入院となり、入院後３ヵ月で正に天馬の如く天に駆け上がっていった。

自分史の終わりに載せる闘病記
老醜日々無残なり病臥中
なんとまあ蚊が素通りするやせた肌
百薬の長に到々破門され

ちょうど父と同じ年となった今年、本土から北海道に仕事先を変え、３月終わりにコロナ禍の関東から慌ただしく転居した。転居に備え、これまでの不用品整理中、すっかり忘れていた父の川柳の遺稿集を見つけた。遺稿集が届いた当初は、さっと目を通しただけでその存在を忘れていた親不孝者である。先にも述べたように、生前は岡山、金沢と離れた生活から、父とじっくりと話すこともなかったが、父と同じ年になり、一句一句に父の心境が理解でき、やっと父とじっくりと話をしているようで、すっかり転居準備も忘れ読み耽ってしまった。この度、医師会からの原稿執筆を依頼されたのを機会に、池田天馬の川柳の一部をご披露させていただきながら、また改めて久しぶりに父との会話の機会をいただいたことに感謝申し上げたい。

資料：池田天馬川柳遺稿集